

平成21年 5月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520635
研究課題名（和文） 祭祀にともなう施設の研究
研究課題名（英文） The investigative research of temporary facilities on folk rituals
研究代表者
黒田 一充（KURODA KAZUMITSU）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：60351491

研究成果の概要：祭りや民俗儀礼の際に神霊を迎えるため、毎回新しくつくられるお仮屋・オダン・オハケとよばれる施設の現状を全国的に調査した。それらは竹を柱にし、杉葉・檜葉・稲藁・小麦藁・茅などを材料にしてつくられるが、都市化や後継者不足の問題で、仮設ではなく毎回使える木製の祠にかえられるなど急速に減少している。しかしこれらは、神社に常設の社殿ができる前の祭祀の様子を伝える貴重な文化遺産であることをあらためて確認した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	360,000	2,560,000

研究分野：日本民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：祭り・宮座・基層信仰・お仮屋・オハケ・オダン・頭屋制度

1. 研究開始当初の背景

日本の祭祀研究において、神霊を祀る当番の家（頭屋）や神輿が運ばれていく御旅所など、祭祀の場所につくられる施設の研究は、戦前から原田敏明がオハケの調査を行い、その研究成果が『村の祭と聖なるもの』（中央公論社、1980年）としてまとめられている。また、彼が主宰した学会誌の『社会と伝承』には、全国のオハケの報告が寄せられたが、原

田の死去後は数えるほどの研究成果しかまとめられていない。また、神霊を祀るためや、司祭者が祭りの際にお籠もりをするためにつくられるお仮屋は、各地の祭りの調査報告で個別に触れられることはあっても、それを総合的に調査する研究者がいないため、関心を持たれることも少なかった。さらに、祭りの当日早朝には壊されている所も多いため、報告書や市町村史の民俗編に写真が掲載される

こともほとんどなかった。その間に、都市化のために毎年材料となる藁や茅などの植物の入手が困難になったことや過疎化によって伝統を引継ぐ若者層が少なくなっていることもあって、お仮屋を毎年新しく造ることをやめて恒久に使える木製の屋形に代え、さらに屋内に祀ることができるように小型化させていくようになっている。近年、新たにこれらのオハケやお仮屋を調査研究した成果も発表されているが、全国的にどのくらい残っているのかはよくわかっていなかった。

2. 研究の目的

祭りにともなうつくられるお仮屋やオダンなどの施設について、どこの集落の祭りでつくられているのか、またその材料や形態の変化といった基礎的なデータもあまり調べられていないというのが現状である。原田敏明の調査から、これらの施設が近畿地方を中心とする西日本の頭屋儀礼の中で濃厚に残っていたことがわかっており、本研究では、西日本から東海地方を中心にして、市町村史などの文献を調査した上で、現地調査を行い、写真や聞き取り調査によって記録を取った。それによって、日本の祭祀研究の基礎データの収集と、伝統的な技術伝承の様子もあわせて記録することを目的とする。

3. 研究の方法

各年度とも、祭りの際に準備などを行なう当番の家である頭屋宅や、祭りで神輿の行列などが出向いて神事を行なう御旅所などに、神霊を迎える目的で祭りの際に造られるオハケ・オダン・オカリヤ（お仮屋）などと呼ばれる祭祀施設の現地調査が主となる。

調査方法としては、現状の写真等による記録と、材料や造り方とそこでの儀礼などの聞き取り、祭りを運営する宮座などの祭祀組織の状況と祭り全体の儀礼の調査、あわせて頭屋で引き継がれる文献資料や古い記録写真などの関連資料の収集と分析である。

4. 研究成果

主に西日本を中心に、お仮屋・オハケ・オダンといった祭りにともなうつくられる施設を調査した。

① 奈良県

近畿地方で、特にお仮屋がよく残っているのは奈良県である。奈良県各地の宮座の祭りでは、頭屋宅の門口や庭にお仮屋がつけられて分霊を迎え、祭りの前日か当日に行列を組んで神送り（宮送り）をすると、ただちにお仮屋を壊している。本研究以前に行った調査の成果も加えると、かつては奈良盆地と周辺部の80カ所以上の集落でお仮屋がつけられており、現在も引き続きその儀礼が行われていることを確認した。

現在もお仮屋の古い形態をよく残しているのは、奈良盆地南端、五條市・下市町・大淀町を流れる吉野川沿いの集落である。これらの各集落では竹を骨組みにして、杉葉や檜葉のお仮屋がつけられている。桜井市の多武峰北麓の集落にもお仮屋が残っているが、橿原市・明日香村では、現在屋外につくられるお仮屋は残っていない。

奈良盆地中部では、川西町・天理市にまだ古い形態のお仮屋が残り、北部の大和郡山市・奈良市では、ほとんどが木製の祠に変わっている。奈良盆地東方の山間部、奈良市都祁や榛原市では、杉葉や檜葉のお仮屋が残っており、西側の生駒山麓には平群町櫛原のオハキが残っている。

② 京都府南部・大阪府

京都府南部では、宮座の儀礼を行う神社内の建物を仮屋と呼んでいるため、神霊を祀る施設はオカリヤではなく、オハケやオダンと呼ばれている。城陽市寺田・久御山町下津屋・京都市の祇園祭には盛砂や芝の上に御幣を立てたオハケが残る。芝や土の壇を何層か築いてその上に御幣を立てたものは、オダンと呼ばれ、大山崎町の小倉神社の氏子区域で残っている。

オダンは、京都府南西部と大阪府の島本町や高槻市にかけての地域でつけられていたが、小倉神社以外には、大阪府島本町に1カ所残っているだけであった。

③ 滋賀県・福井県

滋賀県湖東地域では、草津市下笠町に御地盤、東近江市内の愛知川流域にある3つの神社の春祭りや近江八幡市内でオハケが作られる。湖西地域では、高島市（旧今津町）・弘川祭のオハケが残るだけである。

福井県では、若狭地域の敦賀市からおおい町にかけての集落で祭りにオハケが立てられる。その多くは、長い竹の先に御幣を立てた形態である。石川県能登半島にもオハケが残っているが、今回は未調査である。

④ 和歌山県

吉野川流域の五條市周辺には現在も多数のお仮屋が残っているが、和歌山県に入った紀ノ川流域になると、現在お仮屋は見当たらない。県南部でも、串本町古座の河内祭のお仮屋や新宮市の熊野速玉大社の御杉屋などが残る程度である。

⑤ 三重県

熊野市二木島のお仮屋、尾鷲市の尾鷲神社や二見町の巻藁、志摩市（旧阿児町）の立神や安乗では丸注連をそれぞれ祀っている。伊勢市御薊町高向にはオワケサンをつくり、松阪市東部の和田町・立田町・朝田町の3集落では、オハゲ竹を村境まで担いで行ってそれぞれ引き継いでいく。松阪市の堀切山の浅間祭では、山頂付近で竹の先に御幣を付けたものを立て、オハケと呼んでいる。名張市内にもお仮屋が多数つくられたが、木製の祠に代えられたり、なくなってしまう。同市夏見では、若宮さんとよぶ神籬が残る。

⑥ 兵庫県

オハケが三田市、篠山市、加東市にかけての北摂地域で立てられ、オダン・シバダンが加古川市、高砂市など播磨東部の瀬戸内海側に残っている。西部では、たつの市新宮町牧でお仮屋が作られ、赤穂市東有年でおハケが立てられる。

⑦ 中国地方

岡山県北部の美作地方には、お斎様（オイツキサマ）のお仮屋が残り、真庭市（旧北房町）・井戸鍾乳穴神社ではオハケと供物の棚

を祀る酒部屋が別々につくられ、高梁市川上町下大竹では、このふたつが合体した形態のものが残っている。県中央部では、吉備中央町・吉川八幡宮の南北2つの組の頭屋宅でハケが立てられ、神社の境内に仮屋という区画が造られる。県西部の矢掛町・井原市・浅口市・笠岡市の山間部には、オハケがよく残っており、その中でも浅口市鴨方町・小坂八幡宮のオハケは、下部の円錐形の藁小屋の部分が非常に大型なのが特徴である。

広島県は、東部の岡山県に近い尾道市と竹原市にオハケがあるだけで、県中、西部には見当たらず、瀬戸内海の愛媛県大三島から四国にオハケが分布している。

山口県では、東部の柳井市で神明とよぶ御神体を立てるが、オハケは注連を張るだけである。山陰地方では、鳥取県ではオハケは見当たらず、島根県では松江市美保関町の美保神社の青柴垣神事のオハケや松江市・神魂神社境内にお柴が立てられる。県西部の大田市五十猛町では小正月の行事として、グロとよばれる大型の小屋を建てる。

⑧ 四国地方

四国では、オハケが数多く立てられる。形態は共通しており、ほとんどが、竹を立てて先端に藁束を巻いて御幣を挿したものである。四国4県の中で、徳島県のオハケの数が他県に比べて少ない。香川県ではオハケのほかに、金刀比羅宮で祝舎（いわいや）と呼ぶお仮屋が建てられる。高知県では、中央部の南国市付近から須崎市にかけてオハケが多く見られる。その中で、須佐市・鳴無神社のオハケは、岡山県西部のオハケと同じように下部に竹を円錐形に組んだ形態である。愛媛県は、瀬戸内海の大三島にオハケがあり、北部の西条市丹原町にはオハケではないが、屋根の上に櫛を立てる儀礼が残っている。愛媛県全体を見ると、オハケは豊後水道に面した南西部の愛南町付近に多く見られる。

⑨ 九州地方

九州では、オハケは注連を張っただけのものを呼んでいる。他に大型のお仮屋が作られていて、大分県国見町櫛来ではサカベヤ（神徳屋）でケベス面を祀り、熊本県阿蘇市

の阿蘇神社と国造神社の御田植神事では、御旅所のお仮屋に神輿が安置される。さらに今回の調査で、宮崎県との県境に近い高森町草部で「青はぜ」と呼ばれるお仮屋を確認した。現在は壁の一部だけだが、かつては、屋根と壁が青茅で覆われたという。近畿地方の頭屋宅でつくられるお仮屋に近いものは、玉名市伊倉北方・伊倉南方でつくられる端籠（はしかご）がある。

⑩ 東日本

秋田県湯上市・東湖八坂神社では、竹を立てて藁で巻き、1年間祀るお竹囲いがつくられる。船越地区では、その周りをさらに四角く藁で囲んだものをオハキと呼んでいる。祭りの際には、公民館の屋内に青葭で囲った酒部屋を作り、その中で儀礼を行う。

福島県棚倉町・都々古別神社、茨城県大子町下野宮・近津神社では、種籾とそれを納めた枡を順番に廻すお柁廻しが行われ、お仮屋を建てて祀る。静岡県牧之原市菅ヶ谷でもお柁様神事が行われ、お仮屋の中に細かく切った餅を祀っている。

茨城県石岡市の常陸国総社宮を中心に、7月に青屋祭が行われる。ススキの箸で初物の野菜を食べる青屋箸の民俗があり、同社では祠の屋根を青茅で覆って祭りをを行う。周辺地域では、青茅で神輿を作って川に流す行事もあったが、現在はなくなっている。

長野県千曲市・武水別神社の大頭祭には、頭屋の家に御幣を立てたオハッカイと呼ぶお仮屋をつくって1年間祀る。

伊勢講などの講組織で代参者が遠くの社寺へ参拝の間、道中の安全を祈るためにオハケやお仮屋が建てられた所があった。兵庫県三田市などで、現在もオハケが立てられている。群馬県の赤城山麓の三峯講、埼玉県秩父地方の宝登山講、長野市長沼津野の伊勢講で、お仮屋がつけられた報告があるが、現在ではすべてなくなっている。山梨県韮崎市穂坂町の秋葉講が、お仮屋が残る数少ない事例のひとつである。

他に、大きなお仮屋をつくる例としては、小正月のオコヤ（小屋）があり、山梨県各地に道祖神の丸石を覆う形態で多数残っている。神奈川県内は、都市化のためになくなっ

ており、西部の山間部に入った秦野市八沢や中井町高尾、鴨沢に小型のものがあるほかは、国の無形民俗文化財に指定された大磯町を除いてほとんどなくなっている。

このほか、岐阜県関市の長良川の鶺鴒開きにも、杉葉で屋根を覆ったお仮屋がつけられて神事が行われ、愛知県奥三河地域の東栄町などで行われる花祭りには梵天が立てられる。

⑪ 諏訪信仰のお仮屋

長野県の諏訪大社の年間行事の中で、8月の御射山祭は、穂屋とよぶススキの穂で壁をつかったお仮屋が造られる。上社の穂屋が富士見町の御射山神社に残るほか、小海町・松原諏訪神社にも穂屋が残っている。東京都青梅市根ヶ布にも穂屋が残っていることがわかった。

⑫ 津島信仰のお仮屋

愛知県津島市・津島神社の信仰が伝播し、静岡県東部から滋賀県湖東地域までの広範囲に津島神社の神札を祀るお仮屋が残っていることを確認した。愛知県西部から岐阜県南部の輪中地域では、竹と真菰などを使った棚を作り、オミヨシサンと呼んで祭りをを行う。

静岡県東部の三島市・沼津市から伊豆半島にかけての地域では、お涼みと称して津島社の小祠を麦藁で覆ったお仮屋の中に何日間か祀っている。愛知県東部・新城市の山間部や静岡県西部・天竜川河口付近の磐田市新出と東脇、袋井市西同笠では、氏神社の境内に杉葉などを材料にして、津島社の神札を祀るお仮屋をつくっている。これは、枯れても壊さず、1年間そのまま祀り続ける。同じようなお仮屋は、三重県明和町にもある。

滋賀県の東近江市では、村の辻などに石製や木製の祠を常設し、津島社の神札を祀っている。これらの氏神社の境内に祀られている津島社のお仮屋は、仮設であるため境内末社としては扱われていないが、常設の祠になったものはやがて境内末社となる可能性がある。各地の神社の中には、そのような経過を経た境内末社があったことを推定できる資料である。

⑬ 奄美・沖縄地方

奄美・沖縄では、人が籠もる大型のお仮屋が建てられる。これまでの調査で、奄美大島ではショチョガマと呼ぶ片屋根の仮屋や、沖縄本島の国頭村・大宜味村で旧暦7月に行われるシヌグやウンジャミと呼ばれる祭りの仮屋、南城市の久高島では、ヤドイと呼ばれる仮設の小屋を確認している。久米島ではローカーヤーと呼ぶ壁がない屋根を葉で覆っただけの仮屋がつけられ、そこに座った神女たちが神事を行う。六月ウマチーには各地でローカーヤーがつけられたとのことだったが、今回の調査では5カ所だけしか確認できなかった。宮古島の南岸地域にもお籠もりのための仮屋が建てられるが、毎年つくり変えるものではなく、コンクリートの常設の建物に変わっていたが、儀礼は引き続き行われている。

祭りにお仮屋などをつくることは、かつてはどこにでもある身近な伝統儀礼であったと思われるが、あまりに身近すぎて気づかれないまま、今では守り続けていくことが非常に困難な状態になっている。それは、都市化によって材料の植物が手に入りにくくなっていることや若者人口の減少による後継者が少なくなっていることが原因であるが、特に後継者の問題は、今後、技術伝承が途絶えていく可能性が強い。

ここに報告した事例は、全国的にはまだ一部分のものであり、他所の事例も早急に調査し、記録保存を行う必要性を感じる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①黒田一充「津島信仰のお仮屋」『関西大学博物館紀要』15、1～17頁、2009年、査読無

[図書] (計1件)

①黒田一充『祭りにともなう施設の研究』、科学研究費補助金報告書、i～ii、1～164頁、2009年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 一充 (KURODA KAZUMITSU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：60351491

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし